

島レモンと海域

—小笠原諸島父島における出会いと別れの物語（その3）

横田浩一・河野正治・李婧

小笠原諸島は一年を通して温暖な亜熱帯気候であり、その気候を生かした様々な農産物が生産されている。父島の二見港の直売所には季節の野菜や果物が並べられており、パッションフルーツやトマトなどが文字通り、飛ぶように売れていく。今回はそんな小笠原諸島の農業に注目して海域との関わりを探ってみたい。

東京都小笠原村の農業生産額を上位から見ると、パッションフルーツ、トマト・ミニトマト、レモン、マンゴーの計5品目で全体の8割を占める。その後、コーヒー、オクラ、シカクマメと続く [東京都 2025]。ここでは生産額第3位のレモンに焦点を当て、小笠原諸島との関わりについて見ていく。

小笠原諸島で栽培されているレモンは「島レモン」と呼ばれる（写真1）。この島レモン（学名：*C. Citrophorum Limonioides*）は、オレンジとレモンの自然交配によってできたマイヤーレモンの近縁だとされている [根角ほか 2002 : 66]。小笠原では緑の果実を収穫し、レモンサイダーやレモンジャム（写真2）、レモンゼリー（写真3）などさまざまな形に加工され販売されている（写真4）。果実は通常のレモンより大きい。スーパーマーケットでよく売られている私たちが一般に想像するレモンとは色も大きさも異なる。



写真1 直売所に並ぶ島レモン（2025年12月25日、河野正治撮影）



写真2 レモンサイダーとレモンジャムが並んで売られている

(2024年3月16日、河野正治撮影)



写真3 母島で販売されるレモンゼリー (2024年3月15日、河野正治撮影)



写真4 レモンカード、島レモンオイルも販売されている

(2025年12月25日、河野正治撮影)

島レモンが小笠原諸島で栽培され始めたのは1973年である。それ以前は、菊池雄二が1940年にテニアン島から八丈島に持ち帰り、栽培が始まった。テニアン島でのレモンは「ヤップレモン」とも呼ばれ、ヤップ島が起源であるとされており、父島には菊池の娘である沖山ルリ子が苗を導入したことで栽培が始まった〔根角 2002: 62〕。一方、八丈島では「菊池レモン」、または「八丈フルーツレモン」と呼ばれている(写真5)。小笠原のレモンが緑色の状態で出荷されるのに対し、八丈島のレモンは樹上で完熟させて黄色くなってから出荷するという違いがある。なぜ、テニアン島のレモンが八丈島を経て小笠原にもたらされたのか。テニアン島—八丈島—小笠原には海域を通じたレモンと人の移動の歴史があったからである。



写真5 島レモンの苗木。菊池レモンとも呼ばれる

(2025年12月26日、河野正治撮影)

まずは八丈島と小笠原諸島の関係についてである。1862年に農民の男女30名の八丈島島民が父島に移住した〔対馬 2005 : 16〕。これが最初の小笠原諸島への欧米系

(1876年の明治政府による領有宣言以前に外国より入植し、日本の統治下以降も住み続けた島民とその子孫) 以外の住民であった。「おが丸」出港の際に披露される見送り太鼓のルーツが八丈島にあるように〔李・河野・横田 2025 : 78〕、小笠原と八丈島の関係は深い。明治末期頃には小笠原島民の大半は八丈島出身であったとされている〔対馬 2005 : 16〕。

また、八丈島はサイパン島やテニアン島への移住者を輩出した島でもある。サイパン島やテニアン島は、第一次世界大戦時のドイツの敗北によって日本に統治権が与えられ、1919年から国際連盟の委任統治領として日本が統治することになった。この日本統治時代にミクロネシアは、「南洋群島」と呼ばれていた。1927年には、サイパンにある南洋興発株式会社が主としてサトウキビ畑の開拓を行う農民を募集した。1932年に南洋興発が

発行した「農場移民」の農場別名簿によると、沖縄の次に多いのが東京府出身者で、そのほとんどが八丈島出身者であったという [対馬 2005 : 20]。1927 年から 28 年頃には横浜・横須賀を出港し、八丈島、父島、サイパン、テニアン島へと至る航路（東廻線）ができた。それまでは八丈島には寄港しなかった船がこの頃から直接寄港することになったことで、八丈島からテニアン島への移住者は増加した [対馬 2005 : 19]。テニアン島—八丈島—小笠原のつながりは、現在の日本の航空路線や定期航路からは見えてこない。だが、小笠原の初期の日本人移住者は八丈島出身者であり、八丈島出身者はまたテニアン島へ開拓農民として渡った者が多く、そこにはかつて確かなルートが存在した。

現在の小笠原諸島のレモンの大部分は、八丈島の一正園または母島の折田氏が繁殖したものである [根角ほか 2002 : 62]。レモン栽培が始まったのは上述のように 1973 年であるが、それが本格化するのは 1992 年からであるという¹ [小笠原新聞社 2000]。無農薬で緑色のまま完熟して皮まで食べられ、酸味が少なくほのかな甘味があるのが島レモンの特徴である。近年になって栽培品種としての価値を見出されて特産品となった。

小笠原諸島とテニアン島などミクロネシアとのつながりは、小笠原諸島が内地とミクロネシア間の交通の要衝として経済的・軍事的意味が見出されたことを端緒としている。つまり、小笠原諸島は収奪の対象であるとともに、さらなる「南洋」に経済的・軍事的に拡大するための〈飛び石〉とみなされたのだった [石原 2013 : 129-131]。テニアン島—八丈島—小笠原のレモンの移植ルートは、日本の帝国主義によって開発された航路に基づいており、海を越えた人やモノの移動は、一方では文化交流をもたらしたが、他方では植民地支配の痕跡も残っている。島レモンの来た道をたどることは、日本の植民地支配の歴史を思い起こすことになると同時に、小笠原諸島からの視点で人とモノの移動の来歴やその背景を現在の私たちが知るきっかけを与えてくれると言えるだろう。

参考文献

石原 俊 2013 『〈群島〉の歴史社会学——小笠原諸島・硫黄島、日本・アメリカ、そして太平洋世界』弘文堂。

小笠原新聞社 2000 「小笠原レモン」2000 年 1 月 23 日

<https://www.ogpress.com/3p/news/remon.html> 2025 年 12 月 24 日最終閲覧

¹ 父島に導入された苗木と母島のレモンは同一の起源も持つとみなされている [根角ほか 2002 : 62]。

対馬秀子 2005 「八丈島から旧南洋群島・ミクロネシア・北マリアナ諸島への「農場移民」——動態的民族誌として」『白山社会学研究』13：13-27。

東京都 2025 「小笠原諸島振興開発計画における目標の設定状況と進捗状況」

<https://www.mlit.go.jp/policy/shingikai/content/001900194.pdf> 2025年12月24日最終閲覧

根角博久・原島浩一・和田実・菊池正人・朝長信次・吉田俊雄 2002 「小笠原諸島におけるカンキツ遺伝資源の調査」『植探報』18：57-75。

李婧・河野正治・横田浩一 2025 「「おが丸」出港時に鳴り響く見送り太鼓——小笠原諸島父島における出会いと別れの物語（その2）」『海域アジア・オセアニアNEWSLETTER』3：78-83。

(よこた・こういち 人間文化研究機構／東京都立大学、
かわの・まさはる 東京都立大学、
り・せい 東京都立大学)